

本性をさらけ出した 見せかけの善心攻勢

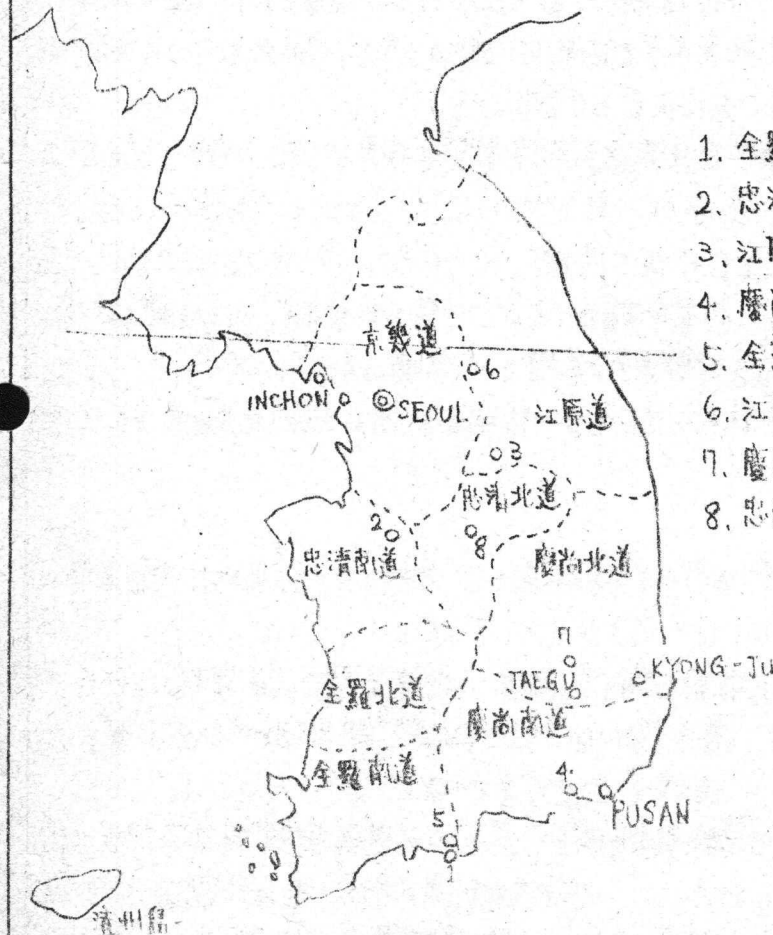
膨大な資金散布で
消費・額龐凡庸則長

投票が終るのを恐れて
各種の事業縮々中断

滞納税金督促ラッシュ……取締りも再然

幣貨以外まで画策 窮細就帝民たち抗議の籠城も

一時、華々しかった不遇者救済後、ナニの眼が隠れるように



1. 全羅南道여천(YO CHON)郡
2. 忠清南道청원(CHONG WON)郡
3. 江原道原州(원주-WON JU)市
4. 慶尚南道馬山(마산-MASAN)市
5. 全羅南道麗水(여수-YOSU)市
6. 江原道春川(춘천-CHUN CHON)市
7. 慶尚北道칠곡(CHILL GOK)郡
8. 忠清北道清州(청주-CHONG JU)市

この他に、善心攻撃でばらまいた金銭のために、農村の一部では消費風潮と
顔癩風潮が新たに生ずるほど、口民投票が残した後遺症もまた、深刻に指摘さ
れている。

全羅南道ヨチョン郡^①では、総予算1億ウオンの、零細民就労事業が口民投票
前の去る10日までに、完了してしまったため、就労事業に大きく頼っていた零細民たち
は、前貸散布の恩恵を殆んど期待することが出来なくなった。

郡下の部落当り40~60万ウオンずつぐらゐ割当てられた膨大な資金が、短
期間に散布されたため、農村の消費性向を強く刺激したことは勿論、2百ヶ所以
上にもものぼる作業場を一度に始動して、又の対象選択を誤り、拙速に着手し
たことも数多い失敗であった。

忠清南道ヨチンウオン郡^②方面ヤンヨソ里の農路施設事業は、口民投票が終
るのを恐れて中断され、一部の石築工事だけをしたまま、打ち捨てられている。
郡当局は「前貸が底をついて工事を続行することができない状態だ」と、云っている。

江原道ウオンジユ市^③は、市内18ヶ洞に計9百万ウオンの前貸散布、種々の就労
事業を遂行するために、口民投票前までは毎日、洞当り平均160余名ずつ就労させ
てきたが、投票後ただちに130名に人員を縮少した。

総予算60余億ウオンの、忠清南道の就労事業も投票が終るや否や、又の内の
30%の事業を中断したまま、薄情な心算をさらけ出して、ヒンシュクを買っている。

口民投票の翌日、去る13日午後5時頃、ソウル市ソンドン区アムサ洞クワンソル
キョ1堤防築造工事場では、作業実績にてらして前貸を計算する、と云う新しい原
則を摘要、甚しい場合、いままでも普通支給されていた前貸の45%までもカットしよう
として、これに抗議する就労零細民5百余名が、現場事務所を包圍して籠城するという
騒動を引き起している。

国の長官が百一線村の長までも総動員して、たわかに吹き荒れた不遇者救援
行事も、投票が終るや跡かたもなく消え失せてしまった。

忠清南道の場合、口民投票の間、零細民、傷痍軍醫、孤児院などに、
20余万袋のラーメンを配布し、養老院には一日も欠かさず慰問団が訪れたが、
投票のあくる日から、又のつましい温情も全く冷えてしまった。

忠清北道の場合も、口民投票期間中、道庁に不遇者救援対策本部まで置
いて、各界から集めた金銭180万ウオン、外米9万8千8百キロ、生活必需品3万7千4袋
小麦粉8万7千9百キロ、用紙8千4百袋などを、救護対象者に配布したが、投票が

終わったとたん、全ての救済活動は殆んど中断されてしまった。

この他、口民投票を控えた一週前、忠清南道が発表した道内の65才以上の老人、10万人に対する劇場、浴場、理髪店の料金割引制度も、投票後、うやむやに尻尾を隠した。忠清南道は口民投票の直前、敬老精神を高めるという名目で、道内54か所の劇場と124か所の浴場、2千7百か所の理髪店に、料金を50%割引くように措置を講じた、と大々的に宣伝した。しかし劇場だけが40%を割引いたのみで、浴場、理髪店は「そんな指示を受けたことはない」と、全額料金をもらっている。これに關し道關係者は「各市郡の割引券発給が遅れ、施行が思うようにいっていないようだ」と、弁明している。

一方、投票前、非常に寛大であった各種法律違反の取締りも、投票が終ると、従来の非情なものとなり、一線警察と行政官署の鼻息は再び荒くなった。

口民投票の終わった13日から慶尚南道馬山市・住宅取締り班は、市内ヤング洞に建てられた無許可建造物撤去に出動し、住民たちと一肉着を引き起した。撤去民たちは、投票前、市關係者が、無許可建造物を見逃してやる、と約束していた事実をあげて、口民に対するギマン戦術だ、と市当局を糾弾した。

口民投票の公告以後、内密に取締りの手がゆるめられていた、忠清南道内の、九斗搥米の売買と、料食業所の九斗搥米使用禁止も、投票が終ると強化されるので、道と17か市郡別に取締り班が出動し、2千5百か所の精米所と5千余か所の料食業体に対する取締りが一尺厳しくなった。

忠清北道もまた13日、各市郡に九斗搥米の売買行為を取締るよう指示した。また全羅南道ヨス市とヨクヨン郡も15日から、各種の取締りを強化、管内130余か所の各種搥精工場に取締り班を派遣して、七斗搥米搥精、低価粉食の売買の履行を監視している。

また14日、全羅北道は高圧ガス法規に違反した62か業所を、一括して許可取消し処分にした。

この他に忠清北道は山林事犯の特別取締り班を編成、^⑧清州警察署は清州市内の商店の立て看板と規格違反看板の取締りに乗り出した。

慶尚馬山市は投票期間中、制限時間を超過しておぼろびろに外燈、ネオンサインなどを灯けて営業していた飲食街、喫茶店などに対して、エネルギー消費節約の取締りを再申している。

しかし、何と云っても投票後、最も顕著なのは税金攻勢である。口民投票が終ると、全羅南道内の市郡では滞納処分班を編成、遊興飲食税をはじめ、各種の地方税滞納額をこの月中に強かに回収する方針を決めたため、住民たちは税金攻勢をモロにかぶることになった。

ヨジョン郡の場合、17日から18日までを地方税滞納額一掃強調期間と決めて、滞納処分班を編成し、いままで滞っていた取得税114万7千ウォン、免許税24万7千ウォン、遊興飲食税11万ウォンなど、地方税滞納額150万4千ウォンを強かに回収することにした。

またヨス市も滞納処分班を編成、17日から今月末まで遊興飲食税、財産税、取得税、免許税などを合わせて千余万ウォンの滞納額を、全て回収することにした。

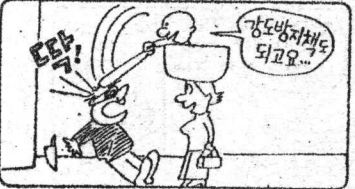
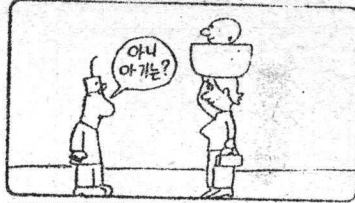
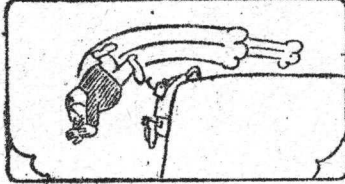
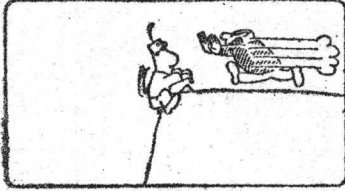
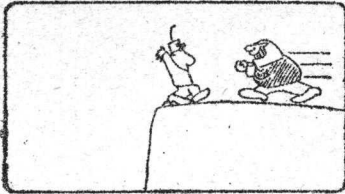
江原道春川市も69年から昨年末まで、滞納されていた住民税、取得税、遊興飲食税などの各種地方税、5721万4千ウォンの内、20%を年度閉鎖期である2月末までに強かに回収することになり、14日、徴収専門班を、各洞別に編成した。春川市は、当初、1月10日から今月末までに滞納額を徴収するつもりだったが、口民投票期間中はナリをいじめ、15日から末日までのわずか13日間に滞納額中、20%を回収することにしたのである。春川税務署も昨年度2月国税、1千百万ウォン、74年度2期分個人営業税などを3月末までに徴収することにした。

しかし、何と云っても口民投票が残した最も深刻な後遺症は、農村の消費凡潮と顔籠凡潮の助長である、と指摘されている。

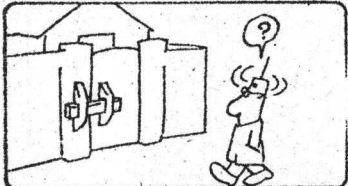
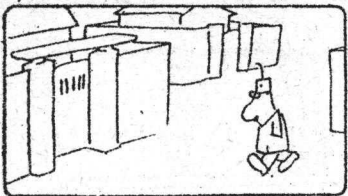
慶尚北道の場合、投票期間中、87億余ウォンを道内にはらまいた。大部分の農村零細民たちは、一日8時間、ウロウロしてだけで千ウォンを稼ぐことができないため、農閑期の副業であるカマス編みなどを返り見ず、就労事業だけを求めた。汗を流さずに市貨を手にすることができぬので、零細民たちは酒場などに通いづめた。投票期間中、一部の農村の酒場は、いつになく繁盛した。

このため慶尚北道全羅南道千ウォン面クモ洞の李某氏の場合、今年収穫する穀物の足農用のカマスを編むために、2千5百ウォンの日当て、働き手を募ったが、なかなか見つからないうえに困っているということである。

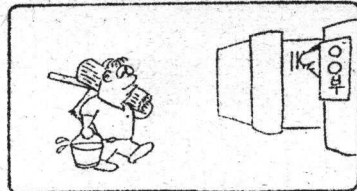
投票期間中、極度に達した消費凡潮と顔籠凡潮こそが、今回の口民投票が農村地域に残した最も深い爪痕であった。



3/3



3/4



3/5



3/6

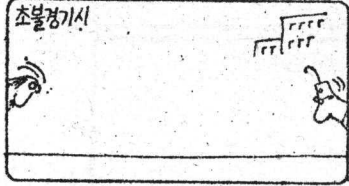


고바우영감 (6359) 김성환

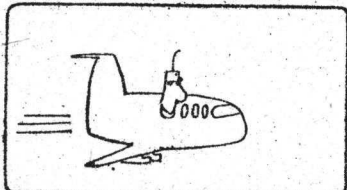


3/7

고바우영감 (6360) 김성환

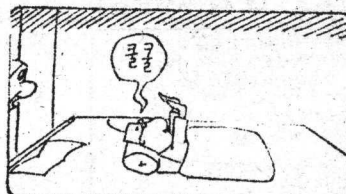


고바우영감 (6361) 김성환



3/10

고바우영감 (6362) 김성환

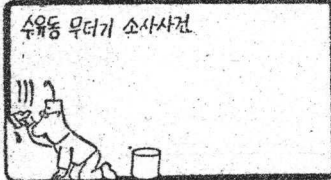


3/11

(6364)

곰바우영감 김성환

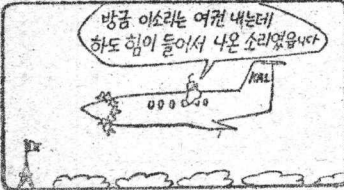
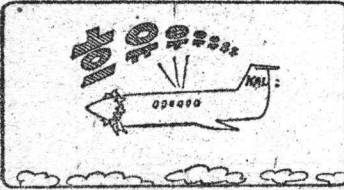
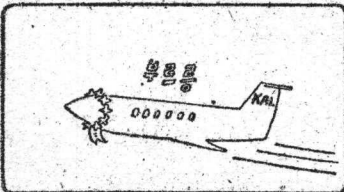
3/13



(6365)

곰바우영감 김성환

3/15



2-26

④こんなことできないかな?

2-27

- ① あい、赤ん坊は?
- ② 子供誘拐防止帯です
- ③ ハンドバッグを出せ!
- ④ ポカッ
強盗防止帯にもなるわよ

3-1

- ① (納税で愛国)(税務所)
過重な税金を納めにきました
- ② 零細民のために使うようお願い
します。
- ③ 拷問する人の月給に使ったり...
- ④ 拷問用肉材や濡れた毛布や、
拷問用の水代に使わないよう
にして下さい

3-3

- ③ 世の中がさかさになったのかな?
かんめきを外に取りつけた家が多
いが...
- ④ かんめきは機織員が取りつけ
たもので、彼らが用いたり肉
めたりするんですよ
ヒャー、野党系人士の家だね

3-4

- ② ヤッー! ガンガン(00部)
- ③ ジャー
官庁の前で何をしているのか!
- ④ これだけやれば、私の家力がおわ
かりでしょう... 拷問担当員に
使って下さい...

3-5

- ① 貨幣改革はない! ないのだ!
- ② 信じる人が全く極小教ですか...
- ③ いつから政府のいうことを信じ
ない運動が起ったのだ?
- ④ 金大中事件、東亜広告事件、不正
投票、拷問暴露をみんなない

知らないとき、こから...
ガク

3-6

- ① 肌着一着 1,200ウオンです
まあ! 足りないわ、もっと集めて
またこよう
- ② 1,500ウオンになりました。
また足りないわ、もっと集めて
また...
- ③ 2,000ウオンになりました。
- ④ そのうち暖くなりますよ、もう
少し待てば夏が...

3-7

- ① 醬油麹(柔らかく蒸した豆を搗
き固めて乾したもので)とろぼうを
よく見ばっていいさい
- ② こんなおいしいものとは今まで
ぞ知らなかった
- ③ まあ! みんな食べてしまったの
ね。
どろぼうのかわりに私が食べた
- ④ (犬肉料理収集人)
重さを計って、買って下ごしら
えしますわ

3-8

- ① (正常時) 生活はどうですか?
- ② (不況時) 生存はどうですか?
- ③ (超不況時)
- ④ 生きのびていますか?

3-10

- ① 外国ではまたストリーキング
が始まったな
- ② (ストリーキング祭本部)
ストリーキングの先駆者に対し
て表彰はないのですか?
あるとすれば誰だね?
- ③ 着ているものをみんな脱げ!
'72年にすでに...

3-11

- ① ゲーゲー
- ② わえ、どうして腕もつ、張って寝てるの？
- ③ 何だかくずれてくるようで……
- ④ 墜台がくずれて女工17名圧死！ このため？

3-13

- ① 一家族虐殺
- ② テバン洞大量圧死事件
- ③ ス工洞大量焼死事件
- ④ そして瀕死状態の大量失職者と解職者……
墨汁が足りないよ。

3-14

- ① 愛読者のみなさん！ 大韓航空のハッキリ旅客路線開設。取材者がいく日面がいてまいます。（祝就航）
- ② フォルリン
- ③ ヒュー
- ④ たな今の音は、旅券を出すのにも力が入って出た音であります。

〈 声 明 書 〉

言論の自由を求めて、ねばり強い努力を傾けて来た我々記者は、今韓国言論史上、最も過酷な試練に出くわしている。30余名の同僚が無慈悲に絶ち切られ、その沈痛な事態を迅早に報道する増面号を出したという理由で、記者協会報が登録を取り消され、その上によりもっと不幸な事態が続くだろうと予測と警告を受けている。

我々は我が10・24 宣言以後、自由言論に向う我々の真摯な情熱と果敢な実践の前に、いつかは大きな障害と報復が現われることを予測したし、実際に我々は、大小のあらゆる困難に聡明に打ち勝って来た。しかし、今、我々が当面している惨憺たる現実には余りにも驚くべきものであり、차리틀? 恐怖すべきものである。義に満ち、能力ある記者が一瞬のうちに解任ないし、罷免され、10年間記者の正直な代弁者の役割を果たした機關紙が無理な理由で廃刊されたことは、自由と安全を標ぼうするどんな社会にも見られない弾圧であり、どんな論理をもってしても決して理解され得ない明白な横暴である。その上、民主回復と人權復活の広範な市民運動を阻止しようとする官憲の横暴的操作が、前近代的経営方針と老朽した敗北主義から脱皮できないまま貧困な生存本能に追われた我が言論の卑屈性と野合して、このような恥辱的事態を造り出したという印象のために、我々はより大きな悲しみと憤怒を感じる。

しかし、我々はこのような危脅と悲しみにもかかわらず、決して絶望へと後戻りしない。反って解任された記者の威風ある信念から、罷免を覚悟した同僚の悲壮な覚悟から、我々は、我々の言論の自由に対するはっきりした展望と、それが導く民権勝利の約束手紙を読み取る。実に我々に迫って来た犠牲と苦痛が、我々が所望し実践するところの自由言論の高貴な保証であることを確信させ、当初出発した時そうだったように血をもって得なければならぬ言論の自由はひたすら、我が記者によって構成しなければならぬという真実にさらに固執させただけである。

我々は今、平和的に聡明に対処している^{ヒョウニョボ}申亜日報の記者、「最後の一人まで最後の一刻まで」と壮健に立ち向う^{ホソニョボ}朝鮮日報の記者、そして彼らを精神的に物質的に支援し、共同の運命に同乗する覚悟を持つ3000人の記者協会会員の代りに、我々の決意と訴えを次のように明らかにする。

1. 我々は言論自由の正統性がどこまでも我が記者にあることを重ねて確認し、この目標に向かってどんな苦難も辞さず、一致団結して自由言論を實踐する。
1. 言論企業人は自由な言論の競争のみが唯一の存在理由であり、経営資産であることを理解し、正論以外の(志義?)の姿勢に戻ることを促求する。
1. 政府は狡猾な言論弾圧策を放棄して、民主人権運動と共に言論の自由を国家の基本統治秩序として確立することを要求する。
1. 国民は言論の自由な発展のみが民権向上の鍵であることを認識し、絶えることなく激励、監督してくれることを訴える。

自由平等、博愛の民主社会に向って、常に大路を正す歴史から後退しないことを、そして善良で賢い民衆の望みから背信しないことを重ねて喚起しながら我々は以上の全要請のもとに次の四つの措置を強く建議する。

1. 政府は記者協会報の取消を即刻撤回すること。
2. 東亜日報社と朝鮮日報社は、解任罷免した記者を無条件に復職、従来通りに戻し、これ以上の犠牲を出さないこと。
3. 政府は東亜日報に対する広告弾圧とその他言論会社に対するすべての威脅を中止すること。
4. すべての記者は、今度の事態が正常化するまで、報道とカンパ、その他すべて可能な限りの方法で支援、結集すること。

1975年3月11日

韓国記者協会

今我々が内外の多くの人工者から波濤のような声援と、熱い激励を受けられていることは事実である。このことが、「東亜」の広告競争の砦を培(つちか)ってこれていることも、もちろんである。しかし、一方では、東亜日報と真心から愛する人々からの切実な忠告があるという事実にも、さぼりたことにはできません。「東亜」の報道は、一面的、一面的で、東亜日報だけを見ていると、世の中の事をそればかりに判断できないという声も、聞こえないわけであることも、もちろん、賢明な姿勢にはよい。

かりに多少の誇張はあるとしても、我々はこのような忠告を謙虚に受け入れ、今層、公平を期して、一歩踏み出し、市井の石(いし)から家庭の主婦が要求する生活情報にいたるまで忠実に、親切に、報道する余裕を、くわえし探し求めることを、丁度たりにも^{せん}求められたい。この「東亜」が、今、必争とするところは、冷静さの回復である。広告弾圧以来、「東亜」の出版、枚数は、あまりに豊富にして、告発競争で一貫しているというのが、社会一般の言評である。

もちろん、「東亜」は、豊富が本(ほん)質(しつ)である(である)に、このようにことごとく対しては、聖人も怒らぬとは言えない。それ故、わかれわかれが、豊富にすることはむしろ当然なことであると言えよう。

しかし我々は、私心をはたして、社会の公器を自在なる言論機関である。いつまでも豊富状態にしていることはできない。冷静さを回復し、まことの言論の姿勢にもどって、その任務を全うすることができ、我々自身の品位を維持することができるということも、わからないわけにはない。豊富は、公正を失わせ、限度をこえれば危険なものであり、時には、予期しない副作用を招くことにもなりうる。

最後に、言いたいことはわが社の秩序問題である。わが社が、多くの記者と社員を、解任し、加罰を、かもし出していることは非常に申すに値する。卒直に言って、社内の位階秩序が保たれることは、取っ払い争いがこれを、卒直に告白し、はなわけては、いかなう。

まして、今のような広告弾圧という外憂(がいゆう)があり、下克上を敢行する社員が、言動おそれという内患(ないわん)を知っている時に、我々が、生き残ろうとする^{あは}、固よりも重要なことが秩序維持であるならば、わが社の秩序維持もできなうと、この難局をのりきつていくことは、猿木求魚(さるぎもとこ)と同(どう)じことである。

「東亜」は、広島弾圧を題材として、韓国だけではない、世界の東亜日
報に発展したという事実を念頭に置いて、この東亜が、無秩序に
より、指弾の対象となるのは、二人は難かたしいことだ。その
どこにあるのか。無秩序は自ら創れる要因を内容の同時性、他人
がつけいるべきを与える。それ故、我々は、いかなる構想を求めても
これを物ともしないで、社内秩序を正すこと、全社的一致協力を達成
しようとするのであり、この度の一連の人事措置もその一環として、理解さ
れるべきものである。

こうして我々は、自由言論守護斗争をさらに断片的に推進するの
であり、韓国の民主発展に微力でも加わるべきができないのである。あ
らばよいように、今、「東亜」に対しては物評もあり、是非もあるべき
事案である。これは韓無根の憶測に基因するものではない、これは、
特采、我々が、新聞放送を製作していかねば、自由言論をこれだけ実践
していかねばという事によって、一掃するべきことを信じる。

そして、広島弾圧以来、熱い声援をおしよる内外の人々には、一部
記者連の製作拒否が溢り出す物評に対しても、襟をぬいて
謝罪の言葉を送るものとする。

1975年3月13日 東亜日報社

(記者注. 記者連の解雇を行なった「東亜日報社」の立場を、
示すために、記しました。
3月13日 一面掲載)

〈出獄の詩〉

苦行……1974

金 芝 河

一〇年間恋いこがれた故郷に手錠姿で……

昼夜を分かちがたい部屋における死との対決

I

私は黒山島^{フクヤマ}で逮捕された。昨年（一九七四）四月二五日の明け方である。島の観光ホテルに私は泊まっていたのであるが、この宿は以前、映画「青女」のロケをやったとき私が助監督として泊まっていた所であった。

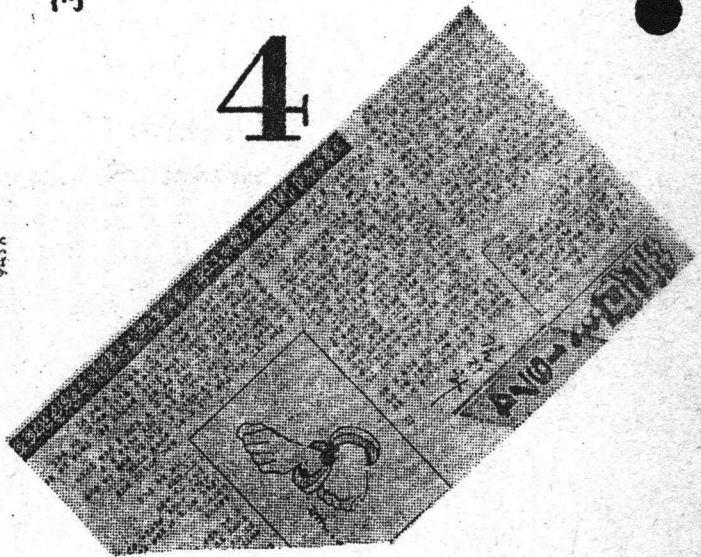
木浦警察署、黒山支署の関刑事は、一

応は丁重な挨拶をしたあと私の両手に手錠をかけ、身柄を船に移した。陰鬱な、そして茫漠とした海を見つめながら、私は魂を失ったように甲板にじっと座ったままであった。

船が木浦の港に着いたとき、ふと私は笛の音を聴いたような幻覚をおぼえた。何かむせび泣くような短調のメロデー

の笛の音である。一〇年余り心にえがきつつけてきた故郷。その故郷に私は手錠をはめられて帰ってきたのだ。うらぶれたおのれの姿、そして目の前に儒連山^{ユレン}が見えている。胸のあの深い奥の底から突然囁咽^{ソウエン}がこみ上げてきた。私に詩心^{シシン}はぐくんでくれた母なる大地。とめどもない悲しみと恨みに血ぬられたあの黄土の

丘々。新墓^{ニム}のお供えをあきさっては米つぶを口に運んでいた祖母のあの瘦せさらばえた指。餓死した甥、じんちゃんの死体を埋めながら芝草に額を打ち叩いていた外祖父の慟哭。竹槍を構え一氣にビニヨ（かんざし）山を駆け下りてきた「ドキヤンイ」のやつ血走った真っ赤な両眼。生き埋めにされた父の亡骸^{ナガレ}を求めて漆黒の真夜中、死体の一つ一つを調べながら、友チャンナム君がもらしていた恐び泣きの声。ああ、その思い出の故郷に私は手錠をはめられて帰ってきたのだ。かろうじて囁咽を抑えながらブリッジを降りたとき、私を迎えてくれたのは波止場にむらがついている魚売りのアジモ



経済の全体像をとらえ、改革の具体策を示す問題の書

経済学と公共目的

J・K・ガルブレイス

久我豊雄訳

定価1800円

大企業体制による国家支配の現実を鋭く分析した前著「新しい産業国家」からさらに進んで、経済的不均衡・不平等の是正を目標に、体制改革のための一般理論を提起するガルブレイスの新しい到達点、体制

ニ(中年の女性) たちであった。生きる

ことに疲れ果て、どす黒く陽にやけた顔のアジモニたちは、手錠姿の私を窃盗か強盗を見つめる表情で見つめてくれた。しかしその表情こそは私を自分たちと同様に貧しく虐げられたもの、自分たちと同様に苛酷な運命を担った、哀れな仲間だと思ってくれる、いわば深い共感のしるしでもあったのだ。その共感の表情の中に、はじめて私は、自分の帰りを迎えてくれる故郷の熱い挨拶を發見したのであった。そうだ。おれは故郷に帰ってきたのだ。

いまおれは、おれと血筋を共にするものたちの中に、誇らしく帰ってきたではないか。呪われた地、全羅道の息子にふさわしく手錠をはめられ、さげすまれて、このおれの故郷の詩人にふさわしく、燃えたる怒りにふるえつつ、一〇年前の昔と変わりなく土ぼこりにまみれたこの貧しい故郷の町に、かつてうだつ上がったことのない息子は帰ってきた

のだ。帰ってきた安堵からであろうか、私は胸の中に春風のほほえみを感じることができたのであった。

II

中央情報部第六局、あの奇怪な色彩で彩られた、四角の残虐な部屋。悪夢か目ざめ、眩しく照らされた壁を見た瞬間、再び悪夢の世界に引きずりこまれるように造られた陰惨な部屋。甘美な追憶や光さす希望は一切よりつけない恐怖の部屋。拷問の途中、口をあけて死んだひからびたしかばねが、壁にかけられたまま数百年間も徐々に腐爛をつづけているような、身の毛のよだつ幻覚を呼びおこす、不思議な部屋。昼か夜か見分けのつかない、いつもねむむたげな電灯がともされた、同じ大きさのうつろな部屋。これらの部屋に一〇日だろうか、一カ月だろうか、われわれは閉じこめられ、死との対決を迫られた。この部屋における瞬間瞬間はすべて生命の身悶えであり、死を前に格闘であった。

帰れまい

この白いねむりの部屋で

もしひとたび

まどろむならば

あの底のない目ま

体の節々を襲う

重い暗いねむり

帰れまい

立ち上がっても

壁に沁みついた血痕

戻ってきた死霊の悲鳴

驚きにふるえ

力んだ両脚で

立ち上がっても

帰れまい

ひとたびここで

まどろむならば

ああ、あの荒野の道に

旅人として、また再びは

はかなく消えうせた友ら

はかなく、はかなく
消えうせた友ら
打ちのめされ、足で蹴られ
罵られ、辱められ
そして眠りにつき
はかなく消えうせた友ら

好評既刊書

新しい産業国家 第二版
都留重人監訳 2800円

スコッチ気質
土屋 哲訳 780円

大使の日記
西野照太郎訳 2200円

経済学・平和・人物論
小原/新川訳 1200円

河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3-6
振替・東京10802/TEL(292)3711

命あるとき
美しくほほえみ
命あるとき
雄々しく叫んだ

友よ 友よ 友よ！

ああ、帰れまい 帰れまい

あの部屋で もしまどろめば

青白く魂を燃やし

狂い 叫び もがかなければ

再びは

風吹く荒野の道に

いとしきものらと

旅人として、また再びは

あの部屋での瞬間瞬間はみな一口で言
えば死であった。死との対面！ 死との

闘い！ これに勝ち、闘うものとしての

内的自由を守り通すか、あるいは屈服し

恥辱に埋もれたまま、むなしく消え去る

か。一九七四年は死の瞬間をもって連ね

られた一年であり、この事件に関連した

すべての人たちにとって死と直面した格

闘の連続である。

しかし死は自らこれを選びとることに

よって勝つことができるもの。この神秘

のパラドックスをつかみとるための苦

行、それがわれわれの仕事であった。

この死の監房、死との対面に明けくれ

た中央情報部の機の中で、私は妻の出産

を知った。男の子である。

私はひざまずいた。神よ、私はいまあ

なたの御心を悟りました。

死刑が求刑されて開口一番「光栄です」

そうだ我らはいよいよ死に打ち勝った

誰かが

暗闇の中から

私を呼ぶ

鉄格子の向かいの監房

錆びついた血の色の關

關の中に入りずくまり

目開いた二つの執念の眼

ああ、沈黙が呼ぶ

瘵のつまった

息のあえぎが

私を呼ぶ

灰色の空は低く

降りしきる小雨に濡れた日

絶え間なく 声は呼ぶ

屋根上の鳩の鳴き声

鍵の音、フツバの音、靴の音

それらに とぎれても

またとぎれても

絶え間なく

私を呼ぶ

血に染まり

鉄窓にかけられた

よれよれの下着が

夜ごと あの地下の部屋で

身もだえた白い亡霊が

引き裂かれた

多くの肉体の悲鳴が

頭をもたげ

そうだ 頭をもたげ

私を呼ぶ

沈黙の世界から

私の血に呼びかける

拒めと

偽りは 拒めと

暗闇の中から

灰色の空低く

降りしきる小雨に濡れた日

あの赤い、赤い

肉体の暗闇の中で

目開いた

あの二つの執念の眼が

灰色の空が低くたれこめ小雨が降りし

きっていたある日、誰かが、瘵をつまら

せた、喘ぐような声が私を呼ぶのでし

た。私はベンキ桶(監房内の便所)に入

り、窓に体をよせて、呼んでいるのは誰

かと、大声で尋ねたわけです。声が答

えるのです、「ハジエウアン(河在完)

ですま」。きつい慶尚道なまりです。

「ハジエウアンって誰ですか」と私は閉

き返しました、「人革党(人民革命党)

ですよ」という答えが戻ってきました。

「ああ、そうですか」。こうして私と河

在完氏との間の「通房」(拘束者たちが

窓ごしに監守の目を盗んで交わす対話)

が始まりました。私の監房は「舎上15

房」彼のは「舎下17房」であったので

す。

「人革党、あれホンモノですかね」と、

私は尋ねました。「デッチあげですよ」

河氏はそう答えました。「じゃ、なぜそ

こに入れられているんですか」と、私は

尋ねました。「拷問ですよ、拷問のせい

です」と、河氏は答えました。「拷問は

ひどかったですか」と私。「ひどいの何

の。はらわたがごっそり抜け出てしまっ

て、話にもならん」河氏はそう答えまし

た。「そうですか、それはどうも」と、

同情を示したら、河氏は答えたのでし

た。「ヤツらも私に、これは政治問題だ

から、ちーとだけ我慢をしてくれと、そ

ういってましたがね」。「ほお」私は絶句

しました。

七月に入り、「診察」の日になって

（「診察」とは医務課の医者が拘束者を全員監房から出し、列を組ませて座らせ、形ばかりの健康診断を行う日課のこと）、順番を待ちながら座りこんでいたら、となりの列にいた男がそと私の肩にふれ、「金芝河さんですね」と小声で話しかけてきたのです。低い背だけ、いくらかがに股で、ちぢれ毛。顔には切り傷の痕があつて、多分若いころは腕力沙汰にひけをとることはなかったと思われる風体の人物でした。「そうですが、あなたは何？」と問い返したら、その人物は「私が河在完です」と答え、右の親指で自分の胸をさすのでした。

こうして実物の河在完氏と監守の目をかすめながら短い会話を交わし、私は彼から「通房」のとき聞かされたと同じ内容の話をもう一度聞くことができたのです。周囲を警戒して声を低め、彼は早口でしゃべりました。地獄の中でまるで百年の知己にでも逢つたように、しっかりと私の肩に腕をめぐらし、熱っぽくその身の毛のよだつ拷問の話をしてくれました。痰をつまらせたあの喘ぐような声。まさに鬼気迫る幽界の物語です。

またそのところのある日、出廷のため監房を出された一人が、私に「金芝河氏です」と語りかけました。「はい、そうですが」と答えたら、「私は李鉄乗です」と名のるのでした。「ああ、あの『蛮敵論』を書かれた李鉄乗氏ですね？」「はい。」「どうなつたんですか？」「ほんとう

に恥ずかしい限りです。何ひとつお役に立つこともできないまま、引っぱられてきて、せつかくの学生運動にドロを塗る役をおしつけられ……ほんとうに申し訳ないんです」。

私は法廷で慶北大学の学生、李康哲が一語一語かみしめるように述べた明確な陳述を思い出します。

「私は人革党なるものが何であるのか、かつてその名前を耳にしたこともありません。ところが、くわしく知っていると思認しないというので検事立ち会いの下で、数回にわたる電気拷問を受けました」

私はいわゆる人革党なるものが、彼らが拷問でつち上げた幻のケースであることを確かめました。

怒りで全身がふるえるときは、私は背中に監房の壁におしつけ、じつと座つたままそれをこらえました。襲いかかる苦しみに私はつぶやきました。

私の血は叫ぶ
拒めと

地の上の如何なる偽りも
それを拒めと

拒めと？　そうです。拒絶です。闇に埋もれた真実を光の中にさらせと？　虚偽をよせつけるなど？　そうです。フェルデリンの詩に見られるあの光の謎。それがまさにこの拒絶でありました。ほんとうにそうでありました。

IV

死刑が求刑された。笑つてしまった。金栗坤（ソウル大）の最終陳述が始まった。開口一番、彼は言ったのであった。「光栄です」と。

いったい、何という言葉だ。「光栄です」！ 死刑の求刑を受けるや「光栄です」とは、いったいどうしたことなのだ。私は魂をゆさぶる衝撃にまきこまれるのを感じた。私はこの言葉の意味を理解したのだろうか。

死刑とは殺すということだ。殺すというのに、命が絶たれるというのに、すべてのものが終わりを告げるというのに、花も風も、つぶらな瞳のきしゃな乙女も、夕焼けに染まつたあの山のふもとの夕餉の煙の美しさも、年老いた母親の、あのしわの刻まれた仁慈な顔も、土に荒れた父親のあの節くれた両手の温かさも、すべてが瞬時にして消え去るというのに、それなのに、「光栄です」？

聖者の言葉か。おれたちが聖者か？

まさか死刑の執行には踏みきれまい、それを見越したうえの皮肉か。やつらの残酷性に底はない。それを知りつくしてあるわれわれに皮肉をもてあそぶゆとりがどこにある。そんなものではないのだ。

では、その言葉の意味は何か。そうだ。ついにわれわれは勝つたのだ。死の恐怖にうち勝つたのだ。

あの地獄の中で血にまみれて挑んだ闘い、その死との格闘にわれわれは勝つたのだ。

だ。

京錫（ソウル大）一人、秉坤一人、あるいは私一人が勝つたのではない。われらはすべて集団的に勝つたのである。勝ち、そしてその死の上に輝く神の御恵みをさえ実感することができたのだ。

死を受けいれることによってわれらは死にうち勝ち、自らが死を選びとることによって、われらは一つの集団として永生を手にしたのである。

われらは鎖につながれた肉体の集団ではあった。しかしその胸中に燃え上がりはじめた真の命のあの光り輝く炎の美しさに圧倒され、ふるえる感激の中でそれを見つめたのであった。あの炎が点じられた瞬間はわれらにとっては歴史的な瞬間であった。その感激はこの地の上のものではない、宗教的なものであったと言えよう。しかしそれだけではない。芸術的感動の極致でもあった。そう、あの瞬間はどんな言葉でも表現しえない。それが何であるとか名づけて説明のしようのない、すべての人間的価値を、すべての莊嚴なものが渾然と一体化する、目もくらむような瞬間であった。靈感というものがあれば、これこそが靈感であろう。

そのときふと、一つの言葉、「政治的想像力」という言葉が私の脳裏にひらめいた。そして、この言葉が、赤く灼熱された烙印のように、私の深い胸の底におしつけられているのを感じた。それは鋭い疼痛を伴った感覚であった。「政治的想像力」、胸に焼きつけられたこの言

葉は、真の意味における政治と芸術の統一を表現するものであった。なまはんな折衷ではない。

統一— これであったのだ。私はとうとう、あの長い年月の間私を苦しめてき

魂は刑務所に置き 鼓だけが出てきた 行き獄門を開き 己の魂を解き放とう

た、自分の民衆運動、政治行動、芸術創作の間の、あのもどかしい気が狂いそうな間隙を、ひとまたぎでのりこえたのであった。宿題に対する決定的な解答を獄中で贈られたわけだ。不思議な、大きな

やすらぎが、滔々として私の五体を満たしてくれた。私はひとりですぶやいた、「ああ、よかった。ありがたしい」。そして、何回も何回も同じ言葉をくり返した。「光栄です、光栄です」と。

犯したものと、共に解き放たれ勝利の旗がひるがえる日、嵐と怒濤の日、あの光り輝く朝日が東天に昇る日、—— 芝河よ、ここはそれを待つ、それを待ったの地獄であるのだ。

やっととはじめて、そう、ほんとうにはじめて私は下に埋もれた怨念との完全な一致を見いだした。それは、思想も膚の色も言葉のなまりも富や知識の有無も、すべてかわりなく、われら全体を一緒に縛りつけている、あの黒光りする鎖と手錠がもたらしてくれた一致であった。水登浦刑務所のうす暗い監房は、いわばすべてのものを呑みこみ、そしてすべてのものを溶融する煮えたぎる溶鉱炉であったのだ。

V

待つということ。その間に流れる長い長い歲月。待つことが何であるかさえ忘れたままぼろ然としてただ待ちつづける、待つばかりに術のない、この狂おしい行為、待つということ。誰かが命を奪ってでも、ただ一度だけでも、このうつろな行為を粉々に打ち砕いてくれることを待ちこがれる、このいらだたしい渴望の長い長い時の流れ。しかしあの獄舎の屋

根に生えた一茎の雑草でさえ、身じろぎもせず、じっと静止をつづける。風も声も光もないこの歲月、無期懲役。充滿した粉塵、獄吏たちの口汚い罵り、背骨がたわみそうな重労働、石ころだらけの麦めし、腐臭を放つアミの塩から、昭和二〇年製四切機、半切機の、絶叫にも似た騒音、強盗や殺人犯たちの血なまぐさい立ちまわり、止めに入っ指を切り落とされ思わず上げた驚愕の悲

鳴— ころは戻りえない奈落を底へ底へと落ちこみ、つかみよらない虚無の中で苦しみがく血まみれの歲月！ 地獄であるのだ。

芝河よ！ 芝河よ！ ここは地獄。ここはお前が来るべくして来た、お前の命の原初の胎内。お前のすべて、爪の先から髪の毛の端まで、お前のあらゆるものを擽げつくし、あの追放された肉體、呪われ魂の群れ、窃盗、強盗、強姦、殺人を

夢を見る
鳥になる夢を見る
鳥になり 高く飛び去る

戦後民主教育の体系が改編されようとしている現在、教育の守るべきものは何かを検討する基礎文獻

刑務所では私は印刷工場にまわされていた。

朴フアツシヨ 政権に抵抗し、自由と民主主義を求める韓国民衆の声と運動。弾圧事件の背後をつく

世紀の大泥棒「説教強盗」自身が涙ながらに語ったその数奇な一生。埋もれた昭和史の一断面を描く

戦後教育の原典

注目の新刊

韓国民民主化闘争地下文献集
中川信夫編著
四六判上製
一、三〇〇円

昭和大盗伝
実録・説教強盗
加太こうじ
四六判上製
一、三〇〇円

戦後教育の原典
編・解説 伊ヶ崎暁生 吉原公一郎
A5判
一、〇〇〇円

現代史出版会

港区新橋4-10-1 電話431-2149

狂おしい夢を見る

作業場の床の

油だらけのむしろの上に

無造作に捨てられた

錆びついた工具

塵芥となつても

私は夢を見る

切られた指をにぎりしめ

遠く飛び去る夢をみる

捨てられた塵芥でも

見る 夢を見る

空に舞う白い風になり

花線乱の表紙にもなり

狂い飛ぶ鳥になり

撒かれた赤い督促状

鳥になつては消え去り

工場外の

果てのない虚空

あとかたもなく いずこへか

潜納額整理実績 復命書 領収書

納税人別徴収簿 明細書 集計票 告

知書

手を放れて 青い鳥になり また

鳥ともなり 消えては帰らず

作業場の床の

油に汚れたむしろの上に

無造作に置き捨てられた

二十の青春

昭和で教えて二十年目の

ああ ぼくは古ぼけた

カワモトの半切機

刷りあげて刷り減り

切られたり折られたり

疲れ果て瘦せ細り

今や歩く気力さえもなく

錆びついて捨てられた

廃品になつても それでも

鳥を養見 切られた指を握れば

赤青の色紙になり

おもちゃの風車になり

田舎の家の壁にはられた

赤いメンコになり

極運びの

色とりどりの輿となり

そのあとは そのあとは

慟哭のように汽笛を鳴らす

ソウル行きの夜汽車になり

夢を見る

鳥になる夢を見る

鳥となりどこへでも

遠くに飛び去る夢

氣を狂わす夢を見る

旅回りの役者になり

あの舞台の上 群衆の上に

カーブの光を反射する

あのトランペットになり

叫んでみよ

声をはり上げて叫んでみよ

山は裂けよ海は濁れよ

そして消え去れ

すべてのものは消え去れ

臭いめしとも 残業とも

縁のない旅役者となり

鳥となり

消えうせてくれ 指よ！

あとかたもなく

思い出のひとかけらも

残すことなく

切り落とされた

このおれの二十

昼も夜もなく、黒色に

ぬりつぶされた永登浦

ぼろ然と独り残された

昭和で教えて二十年目の

ああ おれは古ぼけた

カワモトの半切機

——一九七四年一月三〇日——

いま私は獄門を出てきた、小さな血ま

みれの一本の指である。私は魂と肉体が

ともに解き放たれる遠い遠い将来の日を

待っていた。しかし、奸智にたけた物の

怪の仕業でもあろうか、その遠い遠い將

来に至ることなく突然、獄門の外に抛り

出された。私は傷ついた一本の指、中身

のないカラである。魂が去ったあとの、

うつろな肉体の外殻に過ぎない。

おれの魂、あれほど一致の境にあつ

た、おれの魂はどこにあるのだ？ 人

氣の絶えた夜半の街角を風が吹きぬけて

行く。おれは、どこに魂を置き忘れ、こ

の寂れた真夜中の街を、風に吹かれて

さまよっているのだろう。まだつながら

たままの多くの友ら、はらわたが押し出

されちぎれるほどの接吻をうけ、執念の

眼を見開いたまま、あの暗がりの中にう

ずくまり、喘いでいるはずの彼。胸襟を

開き熱い抱擁を交わした、心の友、強盗

と人殺したち。別れぎわに声を上げて泣

いたベトナム良民の虐殺犯。おれは即ち

彼らであった。彼らは即ちおれであつ

た。おれは自らの魂を刑務所に置いたま

ま出てきたのだ。中身をもたないカラだ

けが出てきたのだ。おれの魂がそこで泣

き叫んでいる。慟哭しながら、解き放し

てくれと、再びその一致をとり戻してく

れと、統一を与えてくれと、おれの肉体

を呼んでいる。再会を求めて叫んでいる

。おれの魂が、帰りによとおれを手招

きで呼んでいる。風の吹きすさぶ灰色の

街に、もぬけのカラのおれの肉体があて

もなく吹きとばされている。

行こう！ おれの魂をさがし求めて行

こう！ 行き獄門を開いて、おれの魂を

解き放とう。解き放ち、涙にまみれて抱

き合いたい。一致、そして統一！

おれの魂に出逢うまで、おれの肉体は

闘うだろう。それが打撃に打ち砕かれ、

こなごなになった粉塵が風に吹かれて消

え去るまで、おれの肉体は闘うのだ。

（まむじは、詩人） 《歌・鄭教養》

「五賊」「民衆の声」などで知られる韓

国の詩人金之河氏は、一九七四年四月二

五日「民書学連事件」で逮捕され、七五

年二月一日釈放された。

『東亜日報』（七五年二月二五、二

六、二十七日付で三回にわたって連

載）から転載。